

課題及び指導改善に向けて

1 調査問題 1 三 (目的や意図に応じて、自分の考えの理由を明確にし、まとめを書く問題)

(1) 課題が見られた問題について

1 公衆電話について

はじめに

先日外出したときに、家に電話をかけようと近くの店に行くと、あつたはずの公衆電話がなくなっていて、こまづましていました。また、よく行く公園の公衆電話も、いつの間にかなくなっていました。わたしは、公衆電話の数が減っているのではないかと、思い、町の公衆電話の数を調べてみることにしました。それをまとめたものが「資料1」です。平成二十年度から二十九年度までの十年間で、約半分にまで減っていることが分かりました。そこで、公衆電話は、わたしたちにとって必要がなくなってしまうのかどうか調べてみることにしました。

2 調査の内容と結果

(1) 公衆電話はどのようなときに必要なのか

多くの人がけいたい電話を持つ中で、公衆電話が必要とされているのかを調べてみることにしました。

そこで、地いきの人三十人を調査の「ア」だとして、公衆電話は必要かどうかを聞いたところ、ほとんどの人が必要だと回答しました。その理由をまとめたものが「資料2」です。

「けいたい電話をわすれたときに必要」、「けいたい電話の電池が切れたときに必要」などの回答がありました。

このことから、公衆電話は、主にけいたい電話を使うことができないときに必要とされているということが分かりました。

(2) 公衆電話にはどのような使い方をもちようがあるのか

公衆電話について書かれた資料を調べてみると、公衆電話には、次のような使い方がありました。

- ・ 警察署(110番)や消防署(119番)には、硬貨やテレホンカードがなくても通報することができます。
- ・ 待電のときでも、硬貨を使って通話することができます。
- ・ 電話が混み合っているときでも、優先的につながります。

このように、公衆電話は、きん急のときに使うことができるということが分かりました。

(3) 公衆電話はどのような場所にあるのか

公衆電話が必要なときに使うことができるようにするためには、どのような場所に設置されているのかを前もって知っておくことが大切だと思ったので、わたしは、公衆電話の設置場所を調べてみることにしました。実際に可歩いてまとめたものが「資料3」です。

この資料から、公衆電話は、主に病院や学校、駅などの多くの人が集まる場所にあるということが分かりました。

調査の結果をもとに考えたこと

調査の結果から、公衆電話は、わたしたちにとって必要がなくなってしまうわけではないと考えました。なぜなら、

また、公衆電話を使いたいときには、多くの人が集まる場所へ行けば見つけやすいのではないかとこのことも考えました。今回の調査を通して知ったことを、学級の友達にイがざらず多くの友達に伝え、公衆電話についてウかんしんをもってもらいたいと思います。

「資料1」

公衆電話設置台数の移り変わり

年度	台数(台)
平成20年度	300
平成21年度	280
平成22年度	260
平成23年度	240
平成24年度	220
平成25年度	200
平成26年度	180
平成27年度	170
平成28年度	160
平成29年度	150

「資料2」

公衆電話が必要となる理由のまとめ(複数回答)

けいたい電話をわすれたときに必要	22人
けいたい電話の電池が切れたときに必要	12人
けいたい電話の使用が禁止されている場所にいるときに必要	5人
けいたい電話の電波がとどかない場所にいるときに必要	4人
けいたい電話や家の電話がつながりにくいときに必要	3人
その他	5人

「資料3」

公衆電話の設置場所を示した地図

この問題では、資料から適切な内容を複数取り上げて、それらを関連付けて書くことが求められています。本文「2 調査の内容と結果」の(1)と(2)の両方から言葉や文を取り上げることが条件となっていますが、(1)の内容は取り上げているものの、(2)の内容を取り上げていない解答が約2割見られました。これは「調査の内容と結果」の(1)と(2)で分かったことをまとめて書く、「まとめの文についての問い」であるという、問題の意図を読み取れなかったことが一つの要因だと思われます。

（２）指導の改善・充実に向けて

「書くこと」の学習において、「事実と感想、意見とを区別したり」「材料を分類したり関係付けたり」、「文全体の構成や展開を考えたり」することを、学習の中で意識して取り組むことが大切です。特に、報告する文では、その目的に応じて、自分の考えたことが客観的な事象に裏づけられたものになっているかを確かめながら、より説得力のある文にまとめられる力を付けたいところです。合わせて、「しかし・要するに・このように」などの「思考に関わる語句」を増やすことも必要です。それには、「話や文の中」で使う機会を積極的に増やすことが効果的です。また、資料から適切な内容を取り上げるために、必要な文や語句を丸や四角で囲む（**①** 問題文中  の部分）ことは、目的や意図に応じて文を整理する上で大変有効です。

[illegible]

2 調査問題 1 四(1) (漢字を文の中で正しく使うことができるかをみる問題)

(1) 課題が見られた問題について

「地域の人三十人を調査のたいしょうとして」「公衆電話についてかんしんをもってもらいたい」の下線部を漢字で書く問題です。どちらも同音異義語があることから、ふさわしい漢字を適切に書くことができなかったと思われます。

○「対象」

→「対称」等の解答… 3割超

○「関心」＜「感心」

「感心」と解答した児童の割合が正答の「関心」を上回る状況

(2) 指導の改善・充実に向けて

漢字の習得に向けて学習する際に、同音異義語や同訓異字も合わせて学習することが重要です。また、漢字や熟語だけを学習するのではなく、実際の文の中で書く活動をしたり、辞典を使って意味や漢字の成り立ちを調べたりすることで、漢字や熟語に対する興味や理解も深まります。高学年では自分が書いた文章を推敲する際に、文脈に沿った正しい漢字の使い方になっているか見返す習慣をつけることが大切です。

3 調査問題 1 四(2)

(文と文との意味のつながりを考えながら、接続語を使って内容を分けて書くことができるかどうかをみる問題)

(1) 課題が見られた問題について

この問題は、読み返した際に 内の一文を長いと考え、読み手に伝わりやすくするために、二文に分けて書き直す問題です。その際、接続語「そこで」の働きを正しく理解し、意味のつながりや文末表現を考えて、求められた文字数で答えることが求められています。誤答した理由として、文中の「ので」が順接の接続語「そこで」に置き換えられることに気付かず、二つの内容に分けて書く箇所を誤ったり、箇所が合っていても元の文の「～思った」をそのまま使い、報告する文章としてふさわしい「思いました」等の敬体の文末表現に書き直すことができなかったりしたことが考えられます。また、長い文を伝わりやすくするために分けるという趣旨を理解せず、 の後に、「そこで」と続けてしまった誤りも考えられます。接続語等に着目して、文や語句のつながりを意識しながら読んだり書いたりすること及び文末表現を敬体または常体にそろえることに、課題がみられました。

(2) 高橋さんは、読み手に伝わりやすくするために、「報告する文章」の の文を二つの文に分けて書き直すことにしました。文の文とをつなぐ言葉には「そこで」を使います。書き直した一文目の終わりの文字と、二文目の「そこで」に続く文字を書きましよう。なお、読点(、)も字数にふくみます。

公衆電話を必要などきに使うことができるようにするためには、どのような場所に設置されているのかを前もって知っておくことが大切だと考えたので、わたしは、公衆電話の設置場所を確かめてみることにしました。

。そこで、

(2) 指導の改善・充実に向けて

文末表現も含め、文を整えることも、接続語を適切に使って分かりやすい文にすることも、言語についての知識・理解・技能に関わっての基本的な内容です。伝えたい内容を相手に的確に伝えるためには、主語と述語との関係、修飾と被修飾の関係などに着目して文の構成を整えることが重要になります。日常生活や授業の中で、それらを正しく意識的に使えるように言語活動を充実させることが大切になります。例えば、低学年を中心に、文の定義を指導した上で一文の中の主語と述語を明らかにして読んだり、中学年を中心に、修飾と被修飾の関係を見つけて図示したりすることが考えられます。また、高学年を中心に、単文、重文、複文の文の種類や働きについて整理した上で、二つ以上の内容を一つの文に書き換えたり、二つ以上の内容が含まれた一文を内容ごとに複数の文に分けて書いたりすることを取り出して学習・指導することも効果的と思われます。児童の関心意欲を大切にしながら、継続して学習し、言語についての知識・理解・技能に関わっての内容の定着を図りたいものです。さらに、話す・聞く、読む、書く活動全般を通して、こういった学習を積み上げ、言語感覚を磨き、不適切な使用に対し違和感が持てるようになると一層学習は進みます。